

# English Garden 第66話

"All was a dream/ Dreamed while the millet cooked."

Translated by Arthur Waley

## 「げに何事も 一炊の夢」 能「邯鄲(かんとん)」(作者不明)

今回は英訳された能「邯鄲」を取り上げました。英文の出典は、イギリスの東洋学者・アーサー・ウェーリー(1889-1966)の翻訳・編集による "The Noh Plays of Japan" (the Charles E. Tuttle Comp.Inc.,1921) です。

この物語は、次のような中国の「邯鄲の夢」の故事をもとにしています。「昔、中国の河北省の邯鄲の町で、蘆生(ろせい)という青年が、仙人呂翁(ろおう)から、栄達が意のままになるといふ枕を借りて昼寝をしたところ、一生のあいだに栄華・富貴を極めた夢を見たが、覚めてみると、眠る前に炊きかけていた黄粱(こうりょう)がまだ煮えていないほどの短い時間だった。」この故事は「一炊の夢」あるいは「邯鄲の枕」などとも言われ、人の世の栄華や功名のはかなさのたとえとして使われます。



英訳能の舞台では、まず登場した宿の女主人が、枕を取り上げて寝台を表す台(後の場面では王座になる)の上に置き、その枕はかつて一晩泊った魔術師が宿賃の代わりに置いていった「邯鄲の枕」であること、その枕で寝る者は一瞬の夢の中に輝かしい自分の過去や未来を見ることができると話します。

次いで登場した蘆生は、自分の生き方に疑問を持ち、人生を導いてくれる師を求めて羊飛山に赴く途中であることを述べて女主人に宿を頼み、邯鄲の枕を借りて昼寝をします。女主人は、そのあいだに粟を炊いておくと言って退出します。

ここで舞台は夢の場面が変わり、楚国の皇帝の位を譲るといふ勅命をたずさえた使者が現れ、蘆生は立派な輿(こし)に乗って都入りをし、皇帝になります。雲の上の宮殿には月の光が満ち、宝石をちりばめた戸が立って庭には金銀の砂が敷きつめられています。旗が立ち並び捧げ物が絶えない華やかな宮殿の中に暮らして早や五十年が経ちました。蘆生はそこで不老長寿の仙薬を与えられ、歌を聞き、舞を見ているうちに場面は移っていきます。次はその部分の描写です。

I watched the seasons pass:  
Spring, summer, autumn, winter; a thousand trees,  
A thousand flowers were strange and lovely in their pride.  
So the time sped, and now  
Fifty years of glory have passed by me,  
And because they were a dream,  
All, all has vanished and I wake  
On the pillow where I laid my head,  
The pillow of Kantan.

「四季折々は目の前にて、春夏秋冬万木千草も一日に花咲けり。面白や不思議やな、かくて時過ぎ頃されば、五十年の栄華も尽きて、誠は夢の内なれば、皆消え消えと失せ果てて、有りつる邯鄲の枕の上に、眠りの夢はさめにけり。(謡曲台本から)。

この間に場面は最初の宿に戻り、蘆生は邯鄲の枕の上から茫然と起き上がり、五十年の栄華も、粟飯を煮る「一炊のあいだの夢 (but the space of a dream./ Dreamed while a bowl of millet cooked)」だったことに気づきます。そこで人の世のはかなさ、栄光のむなしさを悟り、信仰に生きることを誓って故郷に帰るのです。

翻訳者のアーサー・ウェーリーは日本・中国文学の権威で、『源氏物語』『枕草子』始め、和歌や能の英訳などがあり、また、数多くの漢詩も英訳しています。1965年には日本学士院客員に選ばれました。